
FAIRY TAIL ~妖精の化物《フェアリーオブモンスター》~

天翔る堕天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FAIRY TAIL ～妖精の化物～
フェアリーオブモンスター

【Zコード】

Z4563Z

【作者名】

天翔る墮天使

【あらすじ】

ある日、俺は大学から帰ってきて直ぐに昼寝をしていたはずだった。目が覚めたらそこには神様が座っていた。

神様のミスで死んでしまったために、俺は他の世界に転生してそこ暴れます。

作者はかなりの初心者です。

駄文や、少ない戦闘描写は多めに見て下さい。

＼ プロローグ的な ＼（前書き）

どうも、天翔る墮天使です。（キリッ？）
今回が始めての投稿になるので、暖かく見守ってください。（^-^）

では、どうぞよろしくお願ひします。

＼ プロローグ的な ＼

田を覚ますとそこは白をモチーフにした落ち着いた感じの部屋だつた。

俺
「見覚えのない天井だ。」

よし、間違えたからもう一回言い直すか。

俺
「見覚えのない天井だ。」

さて、こういう場面にはこんな感じのお約束がある筈だ。

確か俺は、大学から普通に帰つて来てすぐに睡眠をとつていたのに、何故か起きたらこの部屋にいた。

少し警戒しながら辺りを見回すと、色々な家具が数点、観葉植物が2つ、そしていかにも神様のよつた感じがする、白いローブを着た男の子が一人椅子に座つている。

俺
「どう」と?」

神様

「気がついたかな～？ちなみに僕は神様だよ～。よろしくね、お兄さん！」

俺

「よろしく。」

神様

「お兄さんって～かなり落ち着いてるよね～普通なら～軽くパーティはおこるよ～？」

俺

「残念ながら俺はそういう小説とかを読んでたから ？ ？ ？ ？ ？ ？ ？ ？ ？ ？ ？ ？ ？ ？ ？ ？」

神様

「はい、それは僕が～誤つてジュースを溢して～濡らしちゃったから～それを乾かす為に、ストーブに近付けたら～灰にしちゃったんだ～。」

「たぶん～そのせいで気がつく前に～死んじゃったのかな～。」

「だから～、謝罪と一緒にどこか好きな所に転生させようとして思つて呼んだんだよ～。」

俺

「Oh? ？ ？ ？ ？ ？」

つまり俺は今、田の前に座つていてる子のおっちょこちよいな、
のミスで死んだらしい ？ ？ ？ ？ ？ ？

神様

俺

「じゃあ早速で悪いけど、『FAIRY TAIL』によろしく。
能力とかはどうすればいい？」

神様

5個か ? ? ? ?
アイテムもどうするかな ? ? ? ?
何にしようか ? ? ? ?
? ?
? ?
? ?
? ?
? ?
特殊ア

俺

「いよ」

「1個目は、『ある魔術の禁書目録』（インデックス）に出てくる、一方通行のベクトル操作能力が使用可能。

2個田舎、『ONE PIECE』に出てくる、霸王色、

武装色、見聞色、の3種類の霸気が使用可能。

3個目は、海外ゲームの『Proto

アレックス・マーサーの全能力MAX状態。
4個目は、1万年に1歳だけ歳をとり、尚且つ29歳にな

ると老けなくなる。

5個目は、丈夫な身体

特殊アイテムは、【死んで無い限りならどんな病】^{やまい}でも治せる薬】で、形はなるべく簡単に運べる位の大きさ。」

神様

「うやうやしく

？
？
？
？
ふう、オマケとして、1個目の願い事には触る

だけで成分とか、色々と理解が出来るようになっていたから、

俺

「あっがと！」

「ノルマニーハウス」の本懸念の「ノルマニーハウス」

そして何かを渡してきた、これは
携帯電話？
？
？
？
？
？
？
？
？
？

「じゃつ
？
？
？
？
？
行つてら」 ガチャン
神様

パカツ

「俺
えつ
?」

ルノン

俺

「あつ」

俺SideOut

＼ プロローグ的な ＼（後書き）

如何でしたか？（（（（；。。。））））
かなり心配ですが、読者様の感想や、厳しい指摘を待つてあります。

次回は主人公の詳しい能力を書いていきます。

ではまた会う日まで（ 、 、 ）ノシ

BY 天翔る墮天使より。

主人公の説明や、細かい能力の説明（前書き）

どうも、天翔る墮天使です（キリッ！

今回はオリ主の能力説明なんですが、かなり長いのでザックリと軽く見て下さい。

ではどうぞ（ 、 、 ）ノ

主人公の説明や、細かい能力の説明

名前 ? ? ? ? ? ? ? アレックス ? マーサー
次回からは、『俺』から『アレックス』と書き換えます。

性別 ? ? ? ? ? ? ? ? ? 男性

一人称 ? ? ? ? ? ? ? ? ? 俺

容姿

【服装】 ? ? ? ? ? ? ? 革ジャン「黒」 + フード付きジャンパー「茶」 + 襟付きの長袖シャツ「白」 + ジーパン

〔青〕 + 革靴〔黒〕

〔目〕 ? ? ? ? ?

〔髪〕 ? ? ? ? ?

〔目〕 ? ? ? ? ?

〔髪〕 ? ? ? ? ?

〔目〕 ? ? ? ? ?

〔髪〕 ? ? ? ? ?

〔目〕 ? ? ? ? ?

〔髪〕 ? ? ? ? ?

〔目〕 ? ? ? ? ?

〔髪〕 ? ? ? ? ?

〔目〕 ? ? ? ? ?

〔髪〕 ? ? ? ? ?

〔目〕 ? ? ? ? ?

〔髪〕 ? ? ? ? ?

〔目〕 ? ? ? ? ?

〔髪〕 ? ? ? ? ?

〔目〕 ? ? ? ? ?

〔髪〕 ? ? ? ? ?

【年齢】 ? ? ? ? ? ? ? 22歳

備考

・身長と体重は、自分の現在の状況。（笑）

・年齢は原作に合わせる為に、減らしました。

1個目の能力説明

アクセラレーター

一方通行のベクトル操作能力。

運動量・熱量・光・電気量 etcといった、ありとあらゆるベクトル（向き）を観測し、触れただけで変換する能力。

身体の周

普段は『反射（ベクトルの反転）』に設定されており、

囲を覆うわずかな保護膜に触れた全ての攻撃を、自動的に跳ね返してしまひ。

保護膜に接してさえいれば密着していなくともベクトル操作が可能であり、『膜に接觸している』『巨大な物体として、暴風操作や自転の操作を行うことすら可能である。

受動的な『反射』だけではなく能動的な能力としても優秀で、血流逆転・体内電流操作による心臓麻痺や洗脳、鉄柱飛ばし・身体運動増幅・風向操作によるM7クラスの暴風、竜巻、飛行・高電離気体・再生促進・自転操作・レールガン以上の速度の石礫？？？？？？？？？？など戦闘方面に限らず多岐にわたる応用が可能。

感知能力でもあるため、低周波や放射線など五感で認識できないベクトルも観測できるし、変換できる。

反射といつても万物を拒絶しているわけではなく、物理法則に従つて有害と無害のフィルタを無意識のうちに構築し、生活に必要なもの（必要最低限の酸素や重力等）は反射しないようにして、『それ以外の全てのベクトル』を反射するように設定されている。

自分の意思次第で、有害な音なども反射可能。そのため未知の力であっても『それ以外のベクトル』と認識して反射可能である。

~~~~~ 2個目の能力説明~~~~~

『ONE PIECE』に出てくる、霸王色、武装色、見聞色、の3種類の霸氣。

～相手の”気配”をより強く感じる力、それが”見聞色”の霸氣～  
これを高めれば視界に入らない敵の位置、その数・・・更には次の  
瞬間に、相手が何をしようとしているのかを読み取れる。

～見えない鎧を着るようなイメージ～を持ち、より固い鎧は必然  
的に攻撃力にも転じる～  
実体が無いものに対しても、攻撃ができる。この”武装色”の霸気が  
この世で唯一の対抗手段であるということ。  
この力は武器に伝わせる事もできる。

～相手を威圧する力・・・”霸王色”の霸氣・・・～  
この世で大きく名を上げる様な人物は、およそこの力を秘めている  
事が多い。

ただし この”霸王色”だけはコントロールはできても鍛え上げる  
事はできない、”本人の成長でのみ強化する”。

～～～～～ 3個目の能力説明～～～～～

『Prototype』の、アレックス・マーサーの全能力MAX  
状態。

変装 （へんそう） ?  
? （？） 偽装系 （ぎそうけい） アレックス  
? （？） ALEX

変装を解いてアレックス本来の姿に戻る。

？ ？ ？ **DISGUISE** （変装）

あなたが接觸した人誰でも吸收し変装出来る能力です。  
吸収する事によりその人物の特殊技能、知識、及び外見へのアクセス能力をアレックスに与えます。

【DISGUISE】

CONSUME POWER

捕食能力  
CONSUME BOOST

捕食時の体力回復量が増加する。  
STEALTH CONSUME

「ステルスしながら」

目標が声を上げる前に、速やかに捕食する。

発動するためには、捕食対象を含む周囲のすべてが、  
のことを視認していない状態でなければならない。

DISGUISE POWER

変装能力

防御系

（ぼうぎょけい）

アーマードフォーム

？ ？ ？ **ARMORED FORM** （装甲形態）

バイオマスを身体表面に噴出させ、強固な防弾能力を発揮します。

鎧兜の様なこのフォームで体を覆えば、

眼前の敵を粉碎し、最も強力な攻撃でさえ無効にする、止める事の出来ない力を得られます。

ARMORED FORM

全身を装甲で覆うことにより、全方向からのダメージを軽減し、ダッシュ時に敵や車両を吹き飛ばし、ダメージを与えることが出来る。

発動中は移動速度が低下し、**Glide**が使用不可能になる。

### ? ? ? SHIELD (盾)

左腕をバイオマスで形成された骨状のシールドに変える事ができる。

「今日は、『都合主義』で両腕でもできるようにしました。」

### SHIELD POWER

前面に盾を形成し、前面からの攻撃を大きく減衰するほか、ダッシュ時に敵を吹き飛ばし、ダメージを与えることが出来る。

防御力はArmored Formより高い。

発動中にGlideを使うことが出来るため、Combatスキルの奥義Bullet Diveを活用できる。

移動速度の低下も発生しないため、機動戦に向いている。

### 攻撃系

#### ? ? ? BLADES (刃)

右腕を一度で5、6人の敵を切る事が出来る骨状のブレードに変える事により、敵を真っ二つに切断する事が出来ます。

「今日は、『都合主義』で両腕でもできるようにしました。」

### BLADE AIR SLICE

ブレードを大きく振りかぶり、地面に向かって叩きつける。下方

向への追尾性能は高い。

### BLADE FRENZY

走りながら左右にブレードを振り回す。追尾性能はそれほど高くない。

? ? ? CLAWS (鉤爪)  
クローズ カギヅメ

アレックスの手は相手に致命傷を負わせる事の出来る骨状の鉤爪へと変わり、変形後の彼は即死を与える殺人マシーンと化します。

CLAWS POWER  
クローズ パワー

攻撃力は並だが、振りが素早く、少数の人型敵と戦うのに向いているが、  
GROUNDSPIKE (スパイク)  
グランド スパイク

GROUNDSPIKE 以外に目立った対装甲能力を持つていな  
いのが欠点。

GROUNDSPIKE  
グランド スパイク

地面に腕を突き刺し、離れた地面から棘を噴出させてダメージを与える。

また、上方向に突き上げる力が強く、対象相手の姿勢を大きく乱すこと<sup>が可能。</sup>

DASHINGSLICE  
ダンシング スライス

「ダッシュ中」

地面を滑るように移動し、爪で一発だけ薙ぎ払う。攻撃力はそこそこだが、非常に高い追尾性能を持つため、敵と交差するように使うと、敵の背面まで回つて斬りつけるような機動を取る。

? ? ? HAMMERFIST (鉄槌拳)  
ハンマー フィスト

数百ポンドものバイオマスの塊を両方の拳に移行させる事により、  
鋼や人骨すらも粉々に破壊する巨大なハンマーへと変わります。

HAMMERFIST POWER  
ハンマー フィスト パワー

攻撃力は高く、攻撃速度はかなり遅めだが、極一部の攻撃以外は範囲攻撃能力を持つており、振り回してるので周囲の物を吹き飛ばしまくる。

ノーマルアタックによるコンボは、3段階目の打ち上げ以外は全て範囲攻撃。

**HAMMERFIST SMACKDOWN**  
ハンマーファイスト スマークダウン

大きく力を貯めて、地面に向かってハンマーを叩き付ける。ダメージは見た目ほど強くはないが、非常に広い攻撃範囲を持つため、

周囲を囲まれた状態で威力を発揮する。

**HAMMERFISTEL BOWSLAM**  
ハンマーフィ斯特ルボウスラム

「ジャンプ中」

下方の敵に向かって飛び込み、強烈な肘打ちを繰り出す。

ダメージはそこそこといった感じだが、追尾性能と攻撃範囲はかなり強力。

**HAMMERTOSS**  
ハンマートス

「ダッシュ中」

ハンマーを突きだしたまま、走行中の勢いを利用して敵に飛びかかる。

ハンマーは敵の懷に入れないと真価を発揮できないため、敵集団に突撃を掛けるときには有効に働く。

？ ？ ？ **MUSCLE MASS** (筋力増強)  
マッスルマス

アレックスの腕の筋力を増強させ、両腕の力の焦点を合わせる事で敵により大きなダメージを与えられます。

**MUSCLE MASS POWER**  
マッスルマス パワー

素手状態の攻撃ダメージを強化。

戦闘中に発揮できる機動性能は全能力中随一。

マッスルマス  
MUSCLE MASS THROW

Muscle Mass Throw 中は、投擲によるダメージと投擲射程を強化する。

? ? ? WHIP FIST (鞭の腕)  
? ? ? WHIP FIST (ウイップ)

素早く襲いかかる事が出来る非常にシャープな鞭は敵を半分に切り裂き、離れた場所にいる敵を引っ張ります。

「今日は、ご都合主義で両腕でもできるようにしました。」

WHIP FIST POWER

横方向への範囲攻撃と、奥行きに対する長射程攻撃に関してはまさにエキスパート。

非力そうな印象とは裏腹に、十分な攻撃力を備えており、驚くほどの射程もある。

そして威力も高めなので、離れた場所にいる敵に対しても有効。

STREETSWEEPER

横方向に大きく腕を振ることで、周囲の敵を両断する。

これまた、技の印象とは裏腹に威力が高く、敵を一掃するほどの破壊力を持つ。

LONG SHOT GRAB

腕を伸ばし、遠方の目標を掴む。

軽い目標は引き寄せ、重目標は自分がその場まで飛んでいく。

視覚感知系

? ? ? THERMALVISION (熱源視覚)  
? ? ? THERMALVISION (サーモビジョン)

サーマルビジョンは、あなたの視界が狭くなるリスクと引き換えに、煙で覆い隠された場所や障害物が有る場所での見通しをよく

する事が出来ます。

THERMAL VISION POWER

煙幕効果を遮断したり、感染者を見分けやすくなる。

? ? ? INFECTED VISION (感染者視覚)  
インフェクティジョン ビジョン

あなたの視覚を変更して、潜行性の感染症が人々に忍び寄るのを検出して下さい。 そうする事で、激しい感染を標識の様に際立たせ、ウイルスに汚染された目標を明らかにする事が出来ます。 「今日は、『都合主義で『ウイルス』』=『風邪とかのウイルス』といつ』と、『理解して下さい。』

「特殊能力」

【MOVEMENT】  
○ AIR UPGRADES  
AIR DASH

「ダッシュ」

空中で大きく加速する。 加速度が非常に高いため、.Glideと組み合わせると、地上を走るより早く移動できる。

AIR DASH DOUBLE

Doubleで二回までダッシュ可能になる。

AIR DASH DOUBLE BOOST

「ジャンプ+ダッシュ」

をすると、上方向に向かつて大きく飛び上がる。

GLIDE グライド

「ダッシュ + ジャンプ（空中）」

両手を広げて滑空状態になることで、より長時間滞空することができる。

グライドは空中にいる間は何度でも発動できるため、「Hアダッシュ + ジャンプ」（アダッシュ）をやることで、ほとんど高度を落すことなく高速移動をすることが出来る。ただし、飛翔ではなく滑空のため、永遠に飛ぶ」とは出来ない。

### A I R R E C O V E R Y

「ジャンプ（吹き飛ばされ中に）」

吹き飛ばされた際に身を捻り、素早く通常状態に復帰できる。被迎撃後にダッシュ + ジャンプを使って回避運動を取れるため、文字通り、態勢を立て直すのに有用。

### ○ S P R I N T U P G R A D E S D I V E R O L L

「ダッシュ（移動中に）」

前転。通常状態で出したい時はダッシュ後すぐ離すと出る。だがこのスキルの真髄は、様々な攻撃をキャンセルできる点だ。立ち通常はほぼ全てのフォームでキャンセル可能なので敵が振りかぶったのを見てから回避運動が出来るようになる。

### S P R I N T S P E E D

地上での走行速度が強化される。

### ○ J U M P G R A D E S J U M P U P G R A D E

ジャンプによる飛距離が伸びる。

ジャンプ高度が上がる= グライドで長時間飛行できる= より高速で

移動できる、といふこと。

W<sup>ウォール</sup> A<sup>ジャンプ</sup> L<sup>ラン</sup> J<sup>プラット</sup> U<sup>チ</sup> M<sup>パラ</sup> P<sup>ラ</sup> L<sup>チ</sup> A<sup>チ</sup> T<sup>チ</sup> C<sup>チ</sup> H

「ジャンプ（壁際で）」

壁を使った三角飛びを、何度でも使用できるようになる。

【SURVIVALIBILITY】

○ CRITICAL MASS UP GRADES<sup>マップ</sup>グレード

○ ADRENALINE SURGE<sup>サージ</sup>

アレックスが死亡寸前まで追い詰められると発動する。アレックスは短時間の間、完全な無敵状態となる。

○ HELTH UP GRADE<sup>ヘルス</sup><sup>アップグレード</sup>

○ HEALTH BOOST<sup>ヘルス</sup><sup>ブースト</sup>

自動回復能力：小→中

HEALTH ≪ヘルス≫ BOOST<sup>ヘルス</sup><sup>ブースト</sup> 2

自動回復能力：中→大

○ HEALTH THREE GENERATION<sup>ヘルス</sup><sup>リジェネイション</sup>

○ REGENERATION RATE BOOST<sup>リジェネイション</sup><sup>ブースト</sup>

アレックスの体力が一定値以下を切ったとき、体力が自動的に回復するようになる。Boostを重ねていくことで、自動回復可能な体力上限値が高まっていく。

○ REGENERATEDelay<sup>リジェネイション</sup><sup>ドレイ</sup>

ダメージを受けてから、自動回復が始まるまでの時間を短縮する。

○ COMBAT<sup>コンバット</sup>  
【COMBAT】

○ AIR<sup>エア</sup>

FLYING KICK BOOST フライングキックブースト

FLYING KICKによる射程と威力を強化する。FLYING KICKは全編を通して利用することになるため取得は必須。

FLYING KICK LAUNCHER [FLYING KICK] フライングキックランチャーブースト

ヒット中

FLYING KICKがヒットした瞬間、左足でも敵を蹴り上げることで、追加ダメージを与えると共に、軽量の目標を吹き飛ばすことが出来る。

単純に、FLYING KICKを強化できるスキルと考えれば、取らない理由はない。

FLYING BOWDROP フライングボウドロップ

「壁走り中」

下方向に向かつて、肘を突き出したまま落ちる。

BODY SURF ボディーサーフ

「人間限定」

FLYING KICKの勢いを利用して、飛びかかった相手に乗つて移動する。早い話、FLYING KICKを当てた相手の、前方にいる敵を巻き込むスキル。

移動距離はちょっと短く、巻き込むことが出来る敵はそんなに多くない。

AIR STOMP ハーストランプ

「空中で」

直下に向かつて急降下し、衝撃波を発生させる。キックと違い、全く追尾無しで直下に降りるため、もっぱら、攻撃目的よりは急降下するための手段として利用することが多い。

## CANNONBALL キャノンボール

### 「空中で」

空中で高速回転しながら、対象に向かつて突撃し、対象と周囲の物体を破壊する。

また、対象の間にある軽目標は弾き飛ばしながら移動する。高威力・範囲効果に加え、貫通効果までついたFlyin gK i ckの上位互換。 Flyin gK i ckの後に続けて出すことも可能なため、空中一段攻撃が可能になる。

## BULETDIVEDROP フレッシュ ダイブドロップ

### 「Glide中に」

直下に向かつて急降下し、非常に広い範囲に渡つて衝撃波を発生させ、高空から発動することで、威力と攻撃範囲が増す。

MuscleMass発動中なら、さらに威力と攻撃範囲が増す。

## SPIKE DRIVER スパイクドライバー

両手を振りかぶつて、対象を地面に叩き付ける。 アッパー エアコンボの後にしか発動できない特殊なスキル。

## AREAFFECT エアエフェクト

## GROUNDSHATTER グラウンドシャター

地面を思いつきりブツ叩き、衝撃で対象を空に吹き飛ばす。

## GROUNDSHATTERDROP グラウンドシャッタードロップ

### 「空中で」

GroundShatterの空中版。

高空から発動することで、威力と攻撃範囲が増加する。やや緩やかではあるが、下方向に向かつて加速する性質がある。

GroundShatterより打ち上げる力が強く、大きな相手

の姿勢を崩すほど衝撃を発生させる。

KNUCKLE SHOCKWAVE  
ナックル ショックウェーブ

「グラブ」

拳を打ち鳴らして衝撃波を起こし、周囲の対象を弾き飛ばす。

OR<sup>1ラ</sup>  
GROUNDSPIKE GRAVEYARD DEVASTATOR  
グランドスパイク グレイビヤー ダフスティーラ  
OR<sup>1ラ</sup>  
GROUNDSPIKE GRAVEYARD DEVASTATOR  
グランドスパイク グレイビヤー ダフスティーラ

地面から巨大な棘を何本も突き出し、あらゆるものに致命的なダメージを与える。かなり広い攻撃範囲と、極めて高い攻撃能力を持つ大技。

TENDRIL BARRAGE DEVASTATOR  
テンドリル バラージ ダフスティーラ

全身から触手状の体細胞を幾重にも突き出すことで、周囲の目標を串刺しにする。あらゆるスキルの中でも最も広い攻撃範囲を持ち、攻撃力も非常に高い。

威力はGround spike Graveyard Devastatorには劣る。

O<sup>2</sup>  
GRAPPLING<sup>グラップル</sup>  
GRAPPLING<sup>グラップル</sup>  
SLAM<sup>スラム</sup>

「人型の敵をグラブ中に」

掴んだ人型の敵を地面に向かって叩き付け、衝撃波を発生させる。

POWER BOMBと同様の対人専用スキルのため、オーバーキルの傾向が強くて使い道に困る。

POWER BOMB<sup>パワー ボム</sup>

「スペシャル（人型の敵をグラブ中に空中で）」

敵を引っ掴み、地面に向かつて急降下して地面に叩き付ける。範囲攻撃能力のある投擲技の一種。

＼＼＼＼＼ 4個目と5個目の能力説明  
そのままの意味です。

＼＼＼＼＼ 特殊アイテム＼＼＼＼＼

【大きさ】 ? ? ? ? ? ? « i k » 程の大きさ

【内容量】 ? ? ? ? ? ? 20粒

【オマケ機能】 ? ? ? ? ? ? 1ヶ月おきに、自動で補充される。ただし、20粒以上は増えない。

【入れ物】 ? ? ? ? ? ? « i k » の入れ物

## 主人公の説明や、細かい能力の説明（後書き）

どうでしたか？（（（（；。。。））））  
自分のユーザーページに、逆お気に入りが2人もいたのでうれしいです。（^ - ^）

次回は本編に進む前のお話です。上手く書けるか分かりませんが、  
頑張ります。  
ゞ（@ - @）ノ

ではまた、次回にお会いしましょう。

b y 天翔る堕天使より。

第000・1話 その後（前書き）

どうも、天翔る墮天使です。

3回目がやっと書き終わりました。

ヽ(@)\_(@)ノ

？？？？？？？？

何を言えばいいか分かり

ませんので、始まります。

↓ Side 神

「あ、どうしよう。座標少しずれちゃつたけど、大丈夫かな~?」  
???

「神様、よろしいでしょ?」

神様

「ん~? どうしたの~? 秘書さん?」

秘書

「はい、先程の人物に渡した内容で最初に叶えた能力に少々ながら不備が有りました。」

こちらがその不備のあつた詳しい内容です。」 つ紙

神様

「は~い」

秘書

「それと、転生した先の時間が決まっていなかつたので、原作突入の7年前しておきましたがよろしかつたでしょうか?」

神様

「い~よ~。じゃあ~この事あの人人に送つてといてね~。」

秘書

「わかりました。」 ペコリ

こうして神様の心配事も無くなつて(?)、いつもの仕事を始めました。

秘書さんは手紙を転送して、こちらもいつものように仕事を始めました。

↓ Side Out

↓ Side アレックス

気が付くと穴の中を落ちていた。  
清々しい程の笑顔で送られて来たが、ほぼ垂直に落ちてるからメチヤメチヤ速い。そして最後に神様の口から聞いた、

神様  
(「あ」)

が未だに気になつてゐる。  
そうして一歩内に、足下が少し明るくなつてきた。俺は、恐る恐る下を見ると出口なのか綺麗な雲一つ無い青い空が見える。

アレックス

「はあ？ ？ ？ ？ ？ 空？？」

そこを抜けると遙か上空だつた。  
思考が一旦停止したのは言うまでもないし、しょうがないと思う。  
例えで言つと、『パラシユート無しでスカイダイビング』みたいな感じ。

アレックス

「へんま———まだ落ちるのか———」

少しの思考ですぐ出てきた言葉をだす。

アレックス  
「<sup>グライド</sup>GLIDE！」

その瞬間、両手を広げる事によって滑空状態になり、よう長時間滞空することが出来る技だ。

アレックス

「危ねえ？ ？ ？ ？ これでもまだまだだな。だけど空を飛ぶ為の能力が使えなかつたら間違いなく危険だつたな ？ ？ ？」

安心感に浸つてると、またスピード上がつていき斜め下に落ちていぐ。この技は『飛翔』ではなく『滑空』のため、永遠に飛ぶことは出来ない。

だいぶ離れた所に落とされたらしく、いくつかの町や村が森の奥にチラチラ見えたが、どれがマグノリアなのか分からなかつた。けれど、自分が貰つた能力の確認をしたいため、近場の森の湖の近くに降りる事にした。

湖に向かいながら、アレックスは「自然落下 エアダッシュ グライド 自然落下 エアダッシュ グライド 自然落下」をやること

で、

地上から約40m上空から地面に飛び降りた。この位の高さなら平気らしい。そして、アレックスは田の前の湖を覗いてみるとその姿は？？？？？

アレックス

「完璧にアレックス？マーサーだな？？？？？」

少し幼い感じだけど。」

その姿は、『Prototype』にてくる、アレックス・マーサーだった。しかし、なぜ自分が幼くなっているのだろうと思つていたらさきに、神様から貰つた携帯電話の着信音が鳴つた。確認しようとポケットに手を入れながら近くの切り株に座ると、新着メールが2件届いていたので先に古い方を読んでみると

？？？？

アレックス

「はあつ？」

～～内容～～

これを見てるつて事は～空からのダイブは～無事に着いたつて事だなね～。

あとね～落とす場所と～時間がずれちゃつてね～今原作よりも7年前になつたんだ～。ごめんね～。

それと～能力の確認したら～色々と移せてないのが～あつたらしい

から～詳しい事はメールが届くのを～待つてね～

by 神様より

アレックス

「 ? ? ? ? ? ? ? ? 」

「神様はおつちょこちよいwww」 ポチポチポチポチ  
「よしつ、保存完了！」

そんな感じで1つ目のメールは受け流し、もう1つのメールにはさつきよりも解りやすく書かれていたが、内容が酷かった。

アレックス

「 o h ? ? ? ? ? 」

～～内容～～

ここにちは、神様のサポートをする秘書です。単刀直入に言つと、最初に叶えた能力の一部が不具合により使用できません。

- ～以下の能力が完全に使用できません～
  - ? ベクトル操作による、自動反射能力
  - ? ベクトル操作による、自分の身体能力の向上
- ～以下の能力は条件付きで使用できます～
  - ? 黒い羽の使用

　　使用回数は1日5回が限度。 使用時

間は10分。鍛えれば伸びますが時間と経験、感覚が必要。

？ ベクトル操作での反射能力  
できる。

～以下の能力は支障が無く使用ができます～

算力演算能力

？運動量・熱量・光・電気量 etc といった全てのベクトルを、触ただけで観測、変換する能力。

## 逆算能力？

これらが、貴方に渡した能力におきた不具合と使える能力です。こちらも謝罪といった形で、何かしたかったので5個目の内容を勝手ながら変えました。

『丈夫な身体』とある魔術の禁書目録にててくる、聖人と同じ身体

それと、特殊アイテムは1ヶ月おきに補充されますが、20個以上にはならないようにしてあります。使い方に気をつけて下さい。では、よい第2の人生を楽しんで下さい。

秘書より

PS  
この文章は見終わると自動的に破壊されます。

俺は最後の文章を見て、慌てて携帯電話を投げ捨てる。

それと同時に、音を立てて携帯電話は原型をどじめる」となく、壊れていき最後は潰れて無くなつた。

### アレックス

「『Prototype』の能力は大丈夫かな?さつきGLIDE<sup>グライド</sup>はできたけど ? ? ? ? ? ? ? 」

俺はそこで思考切り替えて、能力確認をする事にした。もし何かの手違いで『Prototype』の能力がアップグレードしないとだめならば、完全に死ぬ。というかやばい。  
俺は焦りながらも近くの木に向かって技をだした。

### アレックス

「GROUND SPIKE！」ドンッ！ズガガガガツ！バシュツ！  
ザクザクザクザク！  
「ジャンプしてからのBLADE AIR SLICE！」ダン  
ツ！ヒュン！ゴオオオオツ！ザンッ！

アレックスの出した技は地面に腕を突き刺し、離れた地面から棘を噴出させてダメージを与える。また、上方向に突き上げる力が強く、対象相手の姿勢を大きく乱すことが可能な能力だ。  
2発目に出した技は、空中でブレードを大きく振りかぶり、地面に向かつて叩きつける。下方向への追尾性能はかなり高い。

そのため、目の前に有つた木は地面から出た棘によってボロボロの穴だらけになり縦に割れた。

アレツクス

「アップグレードしないとできない技ができたりすることは、後の能力は心配無いな。」グウ～～

ପାତ୍ରିକା

?

「グルルルルルルルルルルルルルル」  
(怒)

?

「グノレノレノレノレノレノレノレノレ  
」（笑）

34

アレックスがそんなことを考えていると、不意に後ろの木から怖そ  
うな3匹のライオンの様な動物がいた。  
あと2匹は別の意味で怖い。  
どうやらさつきの、デモンストレーションに驚いて興奮してゐた  
いだ。

勿論あとの2匹は知らない。むしろ知りたく無い。

## アレックス

「 ？ ？ ？ ？ ？」 背に腹は変えられないから、とりあえず倒して食べるのをやつくり考えよつ。」 グウ～～～

アーマードフォルム  
そして、俺はARMORED FORMになりBLADESを両腕に装備して、忘れられた武装色の霸氣を身に纏う感じで装着し『暴

力』と言つ名の『狩り』を始める。  
勿論、決めゼリフは ？ ？ ？  
？  
？

アレックス

「さア、スクラップの時間だ！」

｝ SideOut アレックス

第000・1話 その後（後書き）

いかがでしたか？

今回は戦闘シーンが有りませんでしたが、技を出す時の擬音が微妙でした。（^\_^;）

そろそろクリスマスの時期ですが、風邪を引かないようにして下さい。（>人<）

それでは、皆さんまた次回！

by 天翔る墮天使より。

## 第000・2話 ギルドへの勧誘（前書き）

どうも、天翔る墮天使です。  
なんと初の連続投稿！

勢いに乗つてると楽しいです。

バ (@) ー (@) ノ

では、どうぞ！

俺がフェアリー・テイルの世界に来てから2年がたつた。現在は原作開始5年前となる。つまりナツがルーシィに会うまでは少しづつ近づいてきた。

ちなみに俺はライオン（？）の様な動物を捕食した後、湖の近くにあつた荒れた町の中にログハウスを造つて生活をしている。

大きさは1階建ての1LDKのバス、トイレ付きだ。

なんと、ここら辺の町はあの変な動物達が暴れて被害に有つてたらしい。しかもあの変な2匹がボスという始末だつた。

アレックス

俺はこの2年間で、町から半径4～5kmに生息していた危険な猛獣+別の意味で危険な猛獣を追つ払つた。

建物は一部が破損している所も有つたが、町の人達に『猛獸を追つ  
拠つた』と話したら皆、泣いて喜んだ。

そして話が飛ぶか、霸王色の霸気は半径200mなら威圧ができるようになつたが、まだまだ伸びそうだ。見聞色の霸気と武装色の霸気は最初から完璧に使って、見聞色の霸気での『気配の感知』が2?まで見えるようになった。

それに、ベクトル操作の感知能力を合わせると3?まで伸びるよう

になり、かなり鮮明に見えるようになった。

そして今、その感知能力には見覚えは無いが原作に出てたあのマスターと、紅い髪の女の子が俺の自宅に向かってやって来た。

アレックス

「やつと来たか ? ? ? ? 待ちわびたよ。」

距離にして200mをきつたところだ。ちょっとイタズラで、霸王色の霸氣を軽く1回だけ当ててみる事にした。

↓ Side Out アレックス

↓ Side ???

↓ 霜氣を当たられる少し前↓

? ? ? ? ? 1

「この町にいるんですか、マスター？」ワクワク――

? ? ? ? ? 2

「ああ、この先に建っているログハウスに住んでおるようじや ? ? 気になるのか、エルザ？」

?

最初にマスターが？　？　？　？　？　いやマスター　？　マカロフは一緒に来たエルザという紅い髪の子と道案内をされながら少し話しかけていた。

エルザ

「はい！なんといってもこの辺りの危険生物を、1人で全部倒したり山に返したりしたと聞きました。

マカロフ

うむ。確かにこの辺りの危険生物はそれこそ『Sランク』の依頼ほど危険では無いんじゃが『Aランク』の依頼にしては、ちと荷が重いからの~。

しかも、この辺りの危険生物をたった1人でとなるとかなりの魔導士じやろ？ ？ ？ ？ ？ ？ 一体どんな奴なんじやい？」

マカロフは、道案内をしてくれている男性に聞いてみた。

男性

「最初、僕達はかなり変わった人だと思いましたよ。5年前にこの町にあの変な猛獸を1人で倒しただなんて誰も信じないから、僕を含めた皆が口を揃えて言いましたよ、『じゃあこの辺りの危険生物を全部退治してくれ！』ってね。

そしたら、ものの5日で退治したんだからびっくりしましたよ。

ましでや急に、『俺は魔法が使えないから建物が直せません。だか  
ら自分で町を直しましょ。』だなんて言い出したんですよ。』

マカロフ&エルザ

「「魔法が使えない?」」

男性

「はい。皆みんなが『どうやって倒したの?』って聞いたらあの人は、『威圧した』って言つから皆みんなびっくりしましたよ。あつ、この道の突き当たりがアレックスさんの自宅です。』

そう言つと、男性が指を差した少し狭い1本道の先にまだ新しい感じの家があつた。

男性

「では、自分はここで」ペコリ

マカロフ

「ああ。有りがと」スツ

エルザ

「有難うございました。」ペコリ

マカロフ&エルザ

「？」？？？？？」

エルザ

「マスター、魔法を使わずに『威圧』で倒したと聞くと何故か怖く感じるのですが。」

マカロフ

「うむ。どうやら氣を引き締めて行こうつかの。」

そういうつて2人はアレックスの自宅に近づいた瞬間、先程の男性が言つたアレックスの『威圧』が2人に当たつた。

マカロフ&エルザ

「「ツ————！」」

エルザ

「マスター今のは？ 一体どこから？」

マカロフ

「落ち着くんじゃエルザ。多分だろうがこれが先程の男性が言って  
いた『威圧』じゃろう。」「とりあえず目当ての人物に会うに、行  
こうではないか。アレックス君にの。」スタスター

エルザ

「はい。」スタスター

↓ Side Out マカロフ&エルザ

↓ Side アレックス

アレックス

「だいぶ焦つてるけど、マカロフさんはどうして事なきそつだな。  
多分、勧誘だろうから行く支度でもするか ？ ？ ？ ？ ？」  
と言つても何も無いけどね。」

アレックスの自宅には娛樂の類<sup>たぐい</sup>が一切無いため、俗<sup>ぞく</sup>にいう『殺風景  
な家』ともいえる。

しばらくすると家のドアが開き、1人の老人『マスター ？ マカ  
ロフ』と紅い髪の毛をした、『エルザ ？ スカーレット』が入つ

て来た。

マカロフ

「初めまして、わしはフニアリーテイルのマスターをしている、マカロフじや。そしてこっちがエルザじや。」ペコリ

エルザ

「宜しく。」ペコリ

アレックス

「こちらこそ宜しくお願ひします。マスター？」マカロフそれに

エルザさん。」スッ

（まさかここでエルザにも合つなんて思わなかつたな。）

「申し遅れましたが、俺の名前はアレックス？」マーサー。アレックスと呼んでください

マカロフ

「アレックスか？」おぬしはここで何をしてるんじや？」

アレックス

「普通に生活しています？」最近は猛獸も出て来なくなり平和になりましたから。」

マカロフ

「ふむ？」ここには獰猛なA級の怪物ばかりが住み着く森なんじやつたんだが？」ここ最近でこの森に生息していた危険な猛獸がいなくなつたんじや。」

「それで気になつて来たんじやが？」お主の仕業かの？」

アレックス

「流石ですねマスター？」マカロフ、確かに俺が退治しました。

勿論聞いたと思ひますが『魔法は使つてない』と言つのは事実です。

」

と言つて、マカロフとエルザが驚く

マカロフ

「ふむ ? ? ? 実力も申し分ない ? ? ? なら大丈夫  
かの ? ? ? どうかの?」

エルザ

「私も賛成です、マスター。」

アレックス

「 ? ? ? ? ?」

マカロフ

「おぬし、わしのギルドに入らんかの?」

俺は「これを見つけていたと言つていいほど、嬉しい申し出だ。

アレックス

「喜んで。」ニコニ

Side Out アレックス

## 第000・2話 ギルドへの勧誘（後書き）

いかがでしたか？

登場人物の口調に、違和感があればぜひコメント下さい。

では、また次回！

by 天翔る堕天使より。

PS>アレックスはハーレムは基本的にはありません。一途な男なので？？？？12月21日までに『活動報告』へ詳しく書きます。

## 第000・3話 旅立ち～フェアリーテイルへ（前書き）

どうも、天翔る墮天使です。

今回はアレックスが、ギルドに入つてナツと力比べをする話です。

なんと、活動報告についてコメントが書き込まれました。ヾ(@

ー @)ノ

ありがとうございました。

それでは、どうぞー！

## 第000・3話 旅立ちアフェアリー・テイルへ

↳ Side アレックス

アレックス

「じゃあ町の方はよろしくお願ひします。もしまだ猛獸が出たら、直ぐに駆けつけますから。」

「町の管理や治安も、頼みましたよ皆さん。」

アレックスは町の人達にこの町からでて『マグノリア』にあるギルドに入る事を町の長に伝え、町の人達にも話した。  
勿論誰も止めなかつた。何せ彼はこの町の恩人でもあつたのでこちらで、自由にさせてあげようという話しが前から出ていたのだ。

アレックス

「皆さん、行つてきます。」

こうしてアレックスは、マカロフとエルザが待つてゐる駅に向かつて行つた。

↳ Side Out アレックス

マカロフ

「それにして、あの青年はちと気になるの~。エルザ、お主はど  
うじや?」

エルザ

「マスターもですか? 実は私もなんです。何故かあの男からは『魔  
力』ではない『別の力』が強く感じられます。」

マカロフとエルザは駅のホームにアレックスが来るまでの暇潰し  
に、2人はアレックスについて話していた。

マカロフ

「うむ、ワシも彼の『力』が見たことがないから、どれ程の強さか  
知りたいの。」

エルザ

「・・・マスターも知らない『力』となると・・・ 一体なんでし  
ょう・・・あつ、来ましたよ。」

そんな話をしていると、人混みの中ならアレックスが見えた。そ  
の後3人は列車に乗り、『マグノリア』へと向かっている。  
勿論、さつきの2人が話していた内容は全部アレックスの耳に聞  
こえていたのは言うまでもない。

～Side ギルド内

マカロフ達が駅からおひつて『マグノリア』にあるギルド、フュアリーテイルに向かつてことギルド内では・・・・・・

？？？・・・1

「オイ、クソ炎やんのか、ああん?」 パーパーパーパー···!

？？？・・・2

「上等じやねえか、氷野郎。かかつて来い ！ ！」 パーパーパーパシ ！

？？？・・・3

「なんだあ？またグレイとナツが喧嘩してんのか・・・・  
いつもなら、エルザが止めにはいるのに見当たらぬえな。リサーナ、  
知らないか？」

リサーナ

「確かに、今朝からマスターと一緒に『山のふもとにある町に用がある』つていつてたよミラ姉。」

ハツピー

「あいつ！ ！」

最初に喧嘩をしていた2人は言つまでも無く、『グレイ・フルバスター』と『ナツ・ドラグニル』、相変わらず中の悪い2人組だ。つぎに『フジィーン』、エルザを気にしている・・・・

リラ

「なあ～んだ。てつきりどつかに隠れてるかと思つたぜ。あつはつ  
はつはつ！」（笑）

・・・・・ そうでもなかつた。彼女はエルザと仲が悪く、まさに『  
犬猿の仲』ともいえる程の、仲の悪さだつた。

リサーナ

「 もう、リラ姉つたら。

あつ、ちよつど帰つて來たよ。マスター、エルザおかえり～。あれ  
？マスター、後ろの人つて誰？」

↳ Side Out ギルド内

↳ Side アレックス

アレックス

「 ここがギルドですか、なかなかいい所ですねマスター・マカロフ。

」

マカロフ

「 そうかい？ ありがとな。それと呼び方は何でもいいんじやが、そ

の呼び方じゃと何か、よそよそしい感じが・・・。「

アレックス

「申し訳ない、では『マスター』でいいですか?」

マカロフ

「うむ、お主はこれからワシらの家族じゃから好きに呼ぶがよい。」

リサーナ

「マスター、エルザ～おかえり～。あれ?マスター、後ろの人って誰?」

誰かがこちらに気がついたようだ。

アレックス

「ここにちは、お嬢さん。今日からこのギルドに入る事になった、アレックス・マーサーだ。」

『アレックス』と呼んでくれ。」

（この子がリサーナかな。まだエドラスには飛ばされてなかつたんだな。）

リサーナ

「ここにちは、アレックスさん。」

ミラ

「宜しくな、アレックス。」

簡単に挨拶をしていると、マカロフの横にいたエルザに気がついたある2人は、さっきまで喧嘩をしていたのにビクビクしながら、肩を組んでエルザと話している。

グレイ

「よ、よおエルザ。き、今日も俺達は仲良しだぜえ。な、なあ。」

ガクガク

ナツ

「あ、あい」ガタガタ

エルザ

「うむ、仲良しへいい事だか時には喧嘩して互いの悪い所を見つけるのもいいぞ。」

ナツ&グレイ

「「お、俺達はそんな事（しないぜ。）（するわけねえだろ。）」「

（苦笑）×2

エルザとの話が終わると、エルザは奥の部屋に向かって行く。それを確認した2人は、安心してその場にしゃがみ込んだ。しばらくして、ナツが俺に気づいたらしく『お前誰だ?』、と言つている感じがした。

よく見ると、周りの人気が俺に注目している。

マカロフ

「彼はワシらが用のあつた町にいた、腕のあるフリーの魔導士じや。名前は『アレックス・マーサー』。」

そう言つと、ナツは目を輝かせたりグレイは興味を持つたり、ミラに至つては鬪志をむき出しにしていた。マカロフは続けて、

マカロフ

「近頃、少し離れた町に現れる猛獣を一人で倒したらしいから。皆も最近ギルドでの依頼で、この辺りの猛獣の討伐が少なくなつたじゃろ?」

「それは、ここにいる彼のおかげなのじゃよ。」

一同

「えええええええ?」

ナツ

「そうなのかじつちやん! よし、お前、俺と勝負しちゃ!」

そういう事を言つと、ナツは笑顔で右の拳を俺に向けて言つてきた。勿論右手には、炎を纏つている状態だ。  
こいつはかなりのバトルジヤンキーらしい。というかマカロフ、余分なところは言つた。

アレックス

「少しばら落ち着け。俺とお前は、しょたいめん初対面だろ? そんな人に勝負を挑むのはどうかと思うのだが?」

俺は持てる限りの常識をナツにぶつけて理解してもらいたかったのだが、

ナツ

「いいじゃねえか、ちょっとくらう。早く外に行こうぜ!」

どうやら無駄らしくナツに引つ張られながら表にでた。マカロフも小声で、

マカロフ  
「一回でいいんじゃ。軽くでいいから、やつてくれんかのう？」ボ  
ソボソ

マカロフが苦虫を潰した顔をしていると、周りからは「マスター  
が認めるほど強いらしいぞ。」とか「どれ程の実力を持っているん  
だ？」と、ギャラリーまで増える始末。  
・・・つまり、『闘わないとマズイ状況』という事らしい。

Side Out ギルド内

Side アレックス

マカロフ

「それでは2人共、準備はよいかの？」

ナツ

「早く始めよ! ばー! 」

審判はマカロフがやるらしい。俺が「手加減してやる。」っての  
をナツに持ち掛けたら、「いらねえよそんなもん。」と言われた。

そして、目の前では田をキラキラと輝かせたナツがいる。 . . .  
なんでこんなにうれしそうにできるんだ?

周りはギルドのメンバーに囲まれているので直ぐに降参出来ない。

アレックス

「しかたない・・・・・」

そんな事をぼやいてから、俺は観念して能力を使う事にした。直ぐに『霸王色の霸氣』で相手を『威圧』してもいいが、それだと芸が無いからやめておこう。

アレックス

「マスター」ボソッ

審判のマカロフへナツに聞こえない程の小声で話かける。

マカロフ

「ん? なんじゃ?」ボソッ

アレックス

「ナツにはどの程の力で相手をすればいいでしょう。」ボソボソ

マカロフ

「ふうむ、適当にやればいいのではないか? こう、軽いトレーニング的な感じかのう?」

あ、殺すのは勿論の事じやが、なじじやぞ」ボソボソ

まともな情報は得られなかつた。というよりさう今まで家族つて言つてたのに、その家族に対して殺し以外はオッケーなのか?と、俺が驚愕していると、

ナツ

「はやくしろよつ!」

対戦相手であるナツが、苛立つているのがわかる位の声を出してきた。

アレックス

「分かつたからちょっと黙つてろ。」

俺はMUSCLE MASSマッスルマスを装備した。

ちなみにこの能力は、素手状態の攻撃ダメージを強化。戦闘中に発揮できる機動性能は全能力中随一。

マカロフ

「うん? それがお主の能力かの?」

アレックス

「ええ。相手が相手なので、ある程度本気を出さないと色々面倒でしちゃう。」

俺は苦笑して答えるが、

アレックス

「でも本当は、手加減するのが苦手なんですよ。」クスクス

マカロフ

「・・・・・。」

俺の言葉に黙るマカロフ。そのマカロフを尻目に、俺は戦闘体制にはいりナツに話しかける。

アレックス

「ナツ、と言つたな？先に謝つておこう。」

ナツ

「ん？何をだ？」

アレックス

「手加減は、なるべくする。だから・・・・・死ぬなよ？」

声をかける俺。ナツは思案顔で首を捻つていて。でもこれは先に言つておかなくてはならない。

その瞬間、俺はARMORED FORMを装着した。周りから驚嘆の声がする。ナツも驚いてるようだが、俺は気にせずナツに話す。

アーマードフォーム

アレックス

「さあ、始めようつか？」

準備は万端。俺が両腕を広げながら話かけると、ナツも俺の声で  
我にかえったのか構えなおす。

マカロフ

「始めつ！！」

マカロフの合図とともに、ナツは大きく息を吸い込んでいる。こ  
の技は、確か広範囲にいる敵に対しても攻撃するはずだ。

ナツは周りに関係無く技を出すらしい。

ナツ

「火竜ウの咆哮オオーー！」

避けることもできるが、避けたら後ろにいる皆に当る。俺はしょ  
うがなく手を前に突き出して、

マカロフ

「つー？アレックスツー！」

ナツの炎が直撃した。マカロフの慌てた声が聞こえるが、俺は『武装色の霸氣』で身体の表面を覆っているから少し温かい位だ。確かに、普通に見たら自殺行為だ。

ナツの技の衝撃で、俺の周りに砂塵が巻き上がった。

ナツ

「よし、俺の勝ちだつ！」「ブイー

ナツは勝ちを確信しているようだ。周りからも「なんだ、弱いじゃないねえか。」との声が聞こえる。

アレックス

「俺も随分なめられたもんだな・・・・」

ナツ

「なつ！？」

俺がつぶやくと同時に、砂埃が晴れていぐ。そこには無傷でいる俺がいる。

アレックス

「解析終了・・・ナツ、お前の炎はもう効かない。いや、俺にはもう意味が無い。」

そして俺は先程よりも強く拳を握りながら、

アレックス

「じゃあ……、次はこのちの番だ……なつ……」

そう言つたと同時に、ナツの懷に飛び込む。もう反撃の隙はな  
い。

ナツ

「つー?」

ナツがそれに気がつき、身構えるがもつ遅かった。

ナツ

「うわつー?」

俺はナツの足払い、身体を宙に浮かせた。そしてナツの左肩を押  
されて地面に仰向けるにする。

ドゴンツ!

「じぶしを叩き付けた。先程よりも多い砂埃が宙に舞い上がる。

エルザ

「ナツツ！」

## アレックス

「大丈夫だ、死んでない。」

「なに？！」

エルザに声をかける。そんな怒らないでほしいかつた。普通なら、ただではすまない音だつた。しかし、それは『ナツにあたつて』『時の話だ』。

アレックス  
「ちゃんと外しておいたからだよ。」

その言葉と共に砂埃がはれ、

ナツ  
キユウ

驚いて気を失つてるナツの姿が現れた。それも、

一  
同

「...」の「...」

亀裂の入った地面と共に、3つの穴が見えたからだ···

マカロフ

「そこまでっ！ 勝者、アレックス！」

そこに、マカロフの試合終了の合図がかかる。

アレックス  
「んつ？」

勝負が終わったのに静かだ。辺りを見渡すと、皆口を空けてじつじつと見てゐる。

まさかとは思うが、やりすぎたかな？  
俺がそう思つてみると、急に周りから、

一  
同

「……………」

L

アレツクス

二〇一九

皆の叫びが響き渡った。



## 第000・3話 旅立ち～フェアリーテイルへ（後書き）

いかがでしょうか？

今回はここで終わりましたが、次回はグレイ達がアレックスと勝負をします。

（活動報告内容の途中結果）

ミラジエーン・・・・2票+1票

第000・4話 礼儀知らずに容赦なし（前書き）

どうも、天翔る墮天使です。

今回は、色々な意味で大変でした。

この話から、キャラクターの視点を書き始めましたが、キャラクターの口調がなかなかうまくいきません。ご意見の方、気軽に書き込んで下さい。

では、どうぞ！

↓ Side アレックス

ギルド内では、先程のナツとの戦いでかなり興奮している4人+1人がさつきから俺に、『（もう1回）（俺と）（私と）戦え！』と言つてきた。

ちなみに、その人物は先程負けた

炎の滅竜魔導士『ナツ』、  
氷の造形魔導士『グレイ』、  
雷の滅竜魔導士『ラクサス』、  
騎士を使う『エルザ』、  
吸収・サタンソウルを使う『ミラ』だ。

アレックス

「条件付きで良いなら相手をする。良いか？」

ナツ

「おう！早く言え！」

グレイ

「ナツ、お前は負けたんだから諦めろ。」

ラクサス

「ガキ共の相手はしないで、俺と戦え！！」

エルザ

「少しで良いから手合わせを頼む。」

ミラ

「アレックス早くしろ。」

俺はひとまず、こいつ等に『礼儀』をいち早く叩き込みたい。何ど  
処の世界に年上に對してタメ口で話す奴がいるんだ。

エルザを見習つて欲しいもんだな。個人的にはミラがタイプなん  
だが・・・・・

アレックス

「まず最初に・・・・ナツ、お前はさつき負けたばかりだから諦  
めろ。

次に裸の君、せめてズボンを履け。パンツだけはさすがにマズイ。  
それとヘッドホンの君、お前もまだ『ガキ』の部類だ。調子に乗  
るなよ？

エルザ、一人を相手にしたら休憩させてくれ。それでもいいなら  
相手をする。

最後にミラ、一応俺は年上だ。せめて敬語で頼め。それに女の子  
なんだから、その言葉使いはやめなさい。」

俺は言いたかった事を、全て言つた。全員の名前は知つていたが  
あえて言わない。なんでかつて?こいつ等には、一から『礼儀』を  
叩き込みたいからだよ。

そんな事を言つてると、皆が口々に喋り出した。

ナツ

「次は勝つ!だから勝負だ!」一ツ一

グレイ

「だあーつーしまつた!」バタバタ

ラクサス

「ふざけんじやねえぞ！」バチバチバチッ

エルザ

「ありがとう、アレックス。」ニコッ

リハ

「わ、わかった。次からは気をつける。」オドオド

アレックス

「よろしい。ナツとヘッドホンの君は・・・・ちょっと黙つてろ。」ギンッ！

俺は、霸王色の霸氣をナツとラクサスに気絶させる程度に当てた。ナツはすぐに倒れたが、ラクサスは少し耐えた様だ。だが、こちらも倒れた。

アレックス

「これで礼儀知らずとうるさい奴はいなくなつたな・・・・んつ?どうした。」

それを見ていた3人は若干・・・いや、かなり驚いている。周りにいた人達も「何をしたんだ。」や「ラクサスは負けたのか?」と言っている。

そんな中、1人の人物が口を開いた。

マカロフ

「それはワシ等にしたのや、猛獸を倒したのと同じ『威圧』<sup>いあつ</sup>なのか、アレックス?」

アレックス

「・・・・はい、しかしまスター達にしたのは1割だとすると、2人を気絶させたり猛獸にしたのは2割程の威圧ですので、ご心配なく。」 —コツ

「ああ、話はどぶが俺は暇だが、時間が無い。誰から始めるか決めてくれ。決めてないなら上着を着てない君から始めよう。

グレイ

「お、おう。よろしく頼むぜ。」

そして俺らは、ナツとラクサスを残して、表へと向かう。

勝負の順番は、

- 1・グレイ・フルスター
- 2・エルザ・スカーレット
- 3・ミラジーン・ストラウス

↓ Side Out アレックス

↓ Side 3人

グレイ

(ラクサスが一瞬でやられちました・・・・勝てるのかな?)

エルザ

(なんだかミラの顔が赤くなってるな・・・・まさか。それよりもどうやって、アレックスを倒すかだな。) それよ

リハ

（何をしやがったんだこいつは？急にナツとラクサスを気絶させやがった。しかも、“礼儀が知らないから”って理由でだと？）

（だいぶ本気でからないとまずいな・・・あれ？そういうば、アレックスと始めて会つた時つてタメ口だつたよな・・・なんで怒らなかつたんだ？）

（それに、久し振りに“女の子なんだから”、だなんて言われた／＼）

それぞれが色々な事を考えている。

↓ Side Out 3人

↓ Side アレックス

アレックス

「準備はいいか、グレイ。時間が欲しいなら幾らでもやるが。まあ、あげるつもりは無いけどな。」

グレイ

「じゃあ聞くなよ！期待しちまつたじゃねえか！」

そんな事をしていると、マカロフが審判をやりだした。何だからといって、俺もマカロフも割と楽しんでいる。

そしていつもの事だが、ギルド内にいたほぼ全員がギャラリーと

して集まってきた。

マカロフ

「それでは、始め！」

グレイ

「氷造形・・槍騎兵！」

「氷造形・・大槌兵！」

マカロフの合図と共に、グレイは槍騎兵と大槌兵を繰り出した。  
おそらくだが、槍騎兵でその場に足止めさせているうちに、大槌兵  
で俺にとどめを刺すつもりだろう。

しかし、実際には自分の得意な技をアレックスに1回でもいいか  
ら当てたいだけらしい。

アレックス

「氷の槍とハンマーか・・・組み合わせは素晴らしい・・・だ  
が、まあまあだな。」

グレイ

「なにつ？」

アレックス

「BLADES & SHIELD！」

Side Out アレックス

Side グレイ

マカロフ

「それでは、始め！」

グレイ

「アイスマイク氷造形・・・ランス槍騎兵！アイスマイク氷造形・・・ハンマー大槌兵！」

グレイは、この攻撃を最も得意としている。ランス槍騎兵はかなりのスピードがある為、先制攻撃に向いている。ハンマー大槌兵に至っては、先程の槍騎兵よりはスピードは劣るが、威力は申し分ない為追撃として出した。

グレイ

（決ました！）

アレックス

「だが、まあまあだな。」

グレイ

「なにつ？」

アレックス

「ブレイズBLADES & シールドSHIELD！」

Side Out グレイ

Side

アレックス

俺は右腕にBLADES<sup>ブレイズ</sup>を装着し、右腕を後ろに向けて身体をグレイに對して、半身の状態にした。そしてSHIELD<sup>シールド</sup>を左腕に装着して構えた。最後に、武装色の霸氣を忘れずに身に纏つた。最初の槍騎兵<sup>ラング</sup>をSHIELD<sup>シールド</sup>で簡単に防ぎ、真上からの大槌兵<sup>ハンドマー</sup>をBLADES<sup>ブレイズ</sup>で切った。

グレイ

「はあつ？」

エルザ

「流石だな。」

ミカ

「強すぎだな。」

そして俺は、グレイの真横まで移動して右腕のBLADES<sup>ブレイズ</sup>を喉に突きつけた。

グレイ

「ツ！…！」

マカロフ

「そこまでつ！勝者アレックス！」

一同

「…」「…」「…」「…」「…」「…」「…」「…」「…」

マカロフが楽しそうにしているとギャラリーの大声で起きたのか、

ギルドの中で倒れていたラクサスが目を覚ました。

「Side Out アレックス

「Side 3人

グレイ

（何にも見えなかつた・・・気づいたら横にいて、喉に突きつけられてた。）

エルザ

（やはり強いな。今回は諦めて、ミラと変わつてもううとするか。）  
「ミラ、順番を変わつてくれないか。私は辞退するから、頼む。」

ボソボソ

ミラ

「はあつ？・・・」、今回だけだからなーーー」ボソボソ

エルザ

「すまない、恩にくる。」ボソツ

（やはり顔が赤いな・・・もしかして・・・な？）

ミラ

（ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤ！何だか、ドキドキしてきた！なんで！？落ち着け私、たかが勝負するだけだろ！？）  
カアーッ

それぞれが特集な思いをしたりしている。

Side Out 3人

Side アレックス

アレックス

「なかなか面白い技の組み合わせだつたぞ、グレイ。だがやるなら槍騎兵ランスをもつと早く打ち出して敵を攪乱させてから、大槌兵ハンマーを相手から見えない位置から当てる事だ。」

「まあ弱い相手とか不意打ちなら、かなり強力なコンボだ。俺でもギリギリで反応できたから、危なかつたよ。」

グレイ

「そ、そうなのか。（あの動きは絶対に、強い奴の動きだつた。一つ一つに無駄がなかつたからな。）」

アレックス

「ああ、後は攻撃後の動きに気をつける。どんなに強い技で『結果』が良くても、技を出すまでの『過程』も大事だからな。」

俺はグレイに簡単なアドバイスをしていると、エルザが俺に近づいて“今日は辞めておく”と言つた。つまり次に勝負するのはミラだ。

・・・・・なんだか物凄く顔が赤いが、気のせいだろうか。

## アレックス

「ミラ、始められるか？それともお前も、エルザみたいに辞めておくか？顔がだいぶ赤いが。」

ミラ

「だつ、大丈夫だつ！／＼／＼

マカロフ

「ふつ。・・・では両者準備は良いかの？」

アレックス＆ミラ

「ああ、いいぞ」

マカロフ

「それでは、始め！」

マカロフの合図と共に、俺は走りながらマッスルマスMUSCLE MASSを装着した。ミラも、サタンソウルになり両者の『殴り合い』が始まる。

『殴り合い』は始めてだから、見聞色の霸氣を使ってミラの攻撃を『探知』し始めたら、ミラの後ろからさつきまで倒れていたラクサスが、雷竜奉天劇を繰り出した。

流石にマズイと思い、俺は一旦ミラの右拳を顔の左に受け流し、ミラを左手俺の懷に引き寄せる。そしてミラの後ろから来た攻撃に對して、右腕をSHIELDにして反射を使った。

反射だけでも良かつたが、反射だけで確實に返せるか分からなかつたから、保険として出した。

アクセラレータ一方通行さんの反射能力、久しぶりに使ったような気がする。

## アレックス

「解析終了・・・・・」これで万が一でも安心だな。ミラ、大丈夫か？」

三

アレッケス

・ 気絶してゐる。・・・・・のかこれはなんとか幸せそ二たか

Side Out アレックス

## Will epidemic

マカロフ

「それでは、始め！」

私は闇雲に拳をアレックスに突きつけた筈だったが、アレックスはそれを簡単に避けて、私を抱き寄せた。

三

（えつ？なに？アレックスに抱き締められてる？えり～どりゅう～こと？って言うか私アレックスの首に腕まわしてる？）

(ニ わ て ? バ レ シ ク ケ ス の 息 か 首 に ? や ハ イ や ハ イ や ハ イ シ ? 顔  
が ? ア レ シ ク ス シ ? 力 を 込 め る な ? ア レ シ ク ケ ス の 胸 に 顔 が ? く あ w  
せ d r f t g y ふ じ こ 1 p ? )

} Side

Out

Up

第000・4話 礼儀知らずに容赦なし（後書き）

いかがでしょう？

頑張つて続きを書いていきたいですが、軽いスランプです。（

、）

・

、

でも、諦めません。

次回は、ラクサスへのお仕置き編です。

では、また会う日まで。

b y 天翔る堕天使より。

第000・5話 一方的な勝負（前書き）

どうも、天翔る墮天使です。

何とか書けたけど、あまりの駄文にスランプ気味な俺（ 、 ； ）

原作まで後少しなのでテンション上げて頑張ります。

○（ ）○

では、どうぞ！

↓ Side アレックス

アレックス  
「ヘッドホン君、これは一体全体どういうつもりなのかな?」ギ

ロリツ!

ラクサス

「——ツ?」ゾクツ!

マカロフ

「——ツ?」ゾクツ!

俺は急に攻撃してきたラクサスに対し『その場から動くな!』の意味を込めた威圧をしてから、マカロフには『皆を近づけるな』の意味を込めた威圧をしたのは、この方が早く伝わるからだ。  
2人は理解したか判らないが、ラクサスはその場から動かずにこつちを見ている。マカロフも察してくれたのか、俺に向かって一度頷き俺とラクサスから、皆を離れさせた。

そんな中、ある2人にマカロフが俺に指を差しながら話していると、2人が駆け足で向かってきた。エルフマンとリサーナだった。恐らくマカロフが頼んだのだろう。

エルフマン

「姉ちゃん!アレックスさん、姉ちゃんは大丈夫ですか!?」  
リサーナ

「エルフ兄ちゃん、アレックスさんが守ってくれてたから大丈夫

だよ。」

アレックス

「ああ、大丈夫だ気絶してるだけなんだが……やけに顔が赤いんだ。勝負の前からだつたから、もしかしたら風邪なのかもしない。看病は手伝つから、後は任せてもいいか？」

エルフマン

「はつ、はい！」「（凄く赤い！早く寝かさなきゃ！…）

リサーナ

「わかりました。」（気絶してる割になんだが顔がニヤついてるんだよな…。）

ミラ

「（／＼／＼）」 プシュー

俺は気絶してミラをエルフマンに任して、リサーナにはすっかり忘れていた『特殊アイテム』を1粒渡して、起きたら飲むように伝えた。

そして俺は怒りが爆発寸前だったが、今のを見て反省していれば少し能力を抑えてやろう。と、いった願いを思いながらラクサスにむかつて、

アレックス

「さあヘッドホン君、愉快なオブジェになる準備はできてるかな？それともお前は、スクラップにされたいか？」『ガガガガガガ…！』

Side Out アレックス

俺は確かに攻撃したはずだった。俺の技でもかなり強力な、雷竜奉天劇を繰り出してミラと一緒に倒してやったはずだ。それなのにはあいつは簡単に防いだだけでなく、雷竜奉天劇を俺にそのまま返しやがった。

ラクサス

「どうゆう事だ。」

アレックス

「ヘッドホン君、これは一体全体どうこいつもりなのかな?」ギロリッ!

ラクサス

「ーーッ?」ゾクッ!

マカロフ

「ーーッ?」ゾクッ!

あいつは今、何をしゃがつた?俺が勝負を挑んで氣絶した時よりも、かなりヤバイ感じがしゃがる。『少しでも動けば貴様の命が無いと思え。』とでも言つてゐのか?

だが、俺は最強だ!さつきはきっと、まぐれに決まつているはずだ。そうに決まつている!俺に勝てる奴は、このギルドにはいないんだからな。

### アレックス

「ああヘッドホン君、愉快なオブジェになる準備はできてるかな？それともお前は、スクランプにされたいか？」<sup>ダダダダダダ</sup>…！

### Side Out ラクサス

### Side アレックス

#### アレックス

（マカロフが周りの人を遠ざけてくれて助かった……これで心置きなく能力が使える。）

「ヘッドホン君、自己紹介でもしようではないか。俺の名前は、

『アレックス・マーサー』。好きに呼んでくれ。君の名前は？」

#### ラクサス

「黙つてろ、化物！自己紹介？そんなもん、どうだつていい！このギルドで最強の俺と戦え！」

#### アレックス

「……成る程、『原型が留めなくなるまでこの俺を叩いてくれ。』だな、任せておけラクサス。それと俺の異名は『<sup>モンスター</sup>化物』だから、褒め言葉ありがと。」

俺はラクサスの言葉を自動変換、もしくは自己解釈をした俺は手加減する気はもう微塵も無い。

俺はMUSCLE MASSを装着して、武装色の霸気をMAXま

マッスルマス

で身に纏わせて構える。

ARMORED FORMも個人的に好きだから装着して、黒い羽も出すがこれは自分の腕に巻き付く感じで纏わせる。

こっちの世界に来て興味本位でやってみたら、時間は掛かつたが上手くできた。時間としては30分間使用ができる。回数は20回程だが時々増減する。

アレックス

「実は俺も最凶さいきょうだから気が合つた。」ニヤリ

ラクサス

「これでも喰らつとけ！鳴り響くは招雷の轟き、天より落ちて灰燼と化せ！レイジングボルト！！」バリバリバリッ！

空中から巨大な雷が俺の頭上に掛けて降ってきた。しかし俺はそれを避けずに右拳で打ち消した。

実際は先程の攻撃で演算をしていたから、ラクサスの雷を空気中に小さく分散させているだけであり、そんな強く殴つてはいけない。

アレックス

「それで？何故いきなりミラに攻撃したんだ。運が悪ければ死んでしまっていたかもしれないぞ。」

ラクサス

「うるせえ！大体お前が俺の事を『ガキ』扱いしたからだろ！それにあいつは弱い！なら死んでもかまわん！ハア――ツ！」

そう言いながらラクサスは雷を纏つて俺に突っ込んできた。そん

なラクサスを俺は右拳で鳩尾を殴つた。

ラクサス

「がはつー？」

突っ込んできたラクサスはその場で倒れそうになるが、俺は襟を掴んで無理矢理立たせる。苦しそうだが構わない。

そのまま俺はアッパー・カットをラクサスにかましてからSPiKEDRiVErをやつた。これは両手を振りかぶつて、対象を地面に叩き付ける技。アッパー・カットの後に浮かんでいる敵にしか使えない。

そして地面に叩きつけて倒れているラクサスにGROUND SHATTERもかました。これは、地面を思いつきりブツ叩き、衝撃で対象を空に吹き飛ばす技。

アレックス

「これで、フィニッシュだ。FLYING KICK! & FLiP KICK LAUNCHER!」

フライングキック

FLYING KICKは、ジャンプしてから相手に右足で蹴る技。

FLiP KICK

フリップ

FLiP KICK LAUNCHERはFLYiNG KICKがヒットした瞬間、左足でも敵を蹴り上げることで、追加ダメージを

与え軽量の相手を吹き飛ばす。

ラクサス

「がはあああ！」ズザー——ツ！

ラクサスは、マカロフの近くまで蹴り飛ばされ氣絶している。それをみたマカロフ、はラクサスに近づき頷いた。

マカロフ

「うむ。ここまで一勝者、アレックス！」

マスターが左手を挙げ勝利者宣言をすると同時に周りからは、

マカオ

「すげえぞ！あのラクサスを一方的に倒しやがった！」

ワカバ

「嘘だろ！？あのラクサスが新人に負けたのかよ！？」

ナツ

「アレックス、もう1回俺と勝負しろー！」

マカオ＆ワカバ

「やめとけナツ、あのラクサスでさえ負けたんだ。しかもお前は負けたばっかりだろ？」

ナツ

「やつてみなきやわかんねーだるーーなあ、ハッピー？」

ハッピー

「あいっ！」

周りが少しづつだが騒がしくなってきた。恐らくだが、これが普

段のフェアリー・テイルだろう。だから仕方が無いんだろうな。そう思つてはいるが、息を荒げながらゆっくり立ち上がるラクサス。

ラクサス

「はあはあ・・・・・次、戦うときは必ず勝つ！はあはあ・・・・・覚えておけ！俺が最強だ！」ヨロヨロ

アレックス

「構わん。俺はいつでも挑戦を受ける。だが今はこれを噛み砕いて傷を治しとけ。直ぐに治るはずだ。」つ薬

ラクサス

「クソつたのが！」パシッ！ガリッ！

薬のおかげか、立ちあがるのが大変そうなラクサスだったが、直ぐに立ち上がる事ができたラクサスは、ギルドの中へゆっくり入つていった。

アレックス

「ラクサス、この世界には死んでもいい奴なんていない。ミラもその1人だ。」

ラクサス

「ふんつ。お前は先生か。」

俺は肩を貸しながらラクサスを仮眠室へ運んで寝かせた。ミラは別の部屋で寝ているらしい。顔を出そつとしたが、俺は他のギルドメンバーに背中を押されながら、ギルドの方に言つてしまつた。エルフマンとリサーナがいたので話を聞くと、どうやら俺の渡した

薬を飲んだらまた赤くなつて寝たと言つてはいたが、熱は無かつたみたいだ。この楽しい宴会が終わり次第、顔を出そうと思っている

Side Out アレックス

## 第000・5話 一方的な勝負（後書き）

いかがでしょう？

次回は『ラ』にお見舞いに行く話です。なかなか上手く出来ないので、時間は掛かります。

ではまた次回！

by天翔る堕天使より。

## 第000・6話 // 今元へ行くと、アクシデント発生。（前書き）

どうも、天翔る墮天使です。

今年のクリスマスは家族と過ごしました。

来年こそは・・・と、考えていますがまづ無理でしょう（ 、  
、 ） 、 、

今回はかなり無理矢理感がありますので、暖かい日で見て下さい。

「Side アレックス

（夜中）

俺は、皆が酒を飲みまくつて酔い潰れている奴や、机に突っ伏している寝てる奴、床に寝ている奴を一力所に集めて毛布をかけた。一通りが終わつた所でミラのいる病室へと向かつた。ミラの病室は、ラクサスよりも奥の部屋だとリサーナから聞いておいた。

俺は部屋の扉を開けて中に入った。ミラは気がついたのか、少しだけ動いている。

アレックス

「ミラ、体は大丈夫か？」

ミラ

「ん、誰？ エルフマン？ それともリサーナ？」 モゾモゾ

アレックス

「アレックスだ。少し良いか？」

ミラ

「ア、アレッ――ツ！／＼／＼ ガバッ

アレックス

「シ――ツ。声が大きい。」

俺がミラの口に手を当てて大きな声をだすのを塞ぐと、窓からの

月の光でミラの顔が赤くなっているのが分かる。

俺は取り敢えずミラに落ち着くように説得したが、最初はなかなか落ち着いてくれず興奮していた。

アレックス

「体の具合はもう大丈夫か？もしまだ辛いようなら出直してくるが？」ナデナデ

ミラ

「だ、大丈夫だ！お前の薬を飲んだら直ぐに治つたぞ／＼あ、ありがとう／＼」カアアツ

アレックス

「そうか。お前が無事で良かつた・・・・・だいぶ顔が赤くなつてるが本当に大丈夫なのか？」スツ、ピトツ

俺がミラの頭を撫でると、ミラの顔が赤くなってきた。そこで俺は、両手でミラの顔を支えて俺のオーテ「」にあてた。確かに熱は無いようだが少し熱い気がする。

アレックス

「今は無理しないでゆっくり寝ていろ。まだ治つてないようだからな・・・・大丈夫か？」

ミラ

「￥（／＼／＼／＼）／＼」プシュー

俺は取り敢えず、赤くなつてしまつたミラをベットに戻しておいた。俺は不意に窓の外に目を向けると、そこには神様と綺麗な人が

浮かんでいる・・・・・なんで？

神様は俺に向かつて手招きをしていたのでギルドの入口から出て行き、神様の方へ向かつた。

アレックス

「何であんたがココに居るんだよ。さっきのが人目についたら、流石にマズイんじゃないか？」

神様

「大丈夫だよ。僕達の周りには、結界みたいな、特殊なものを張り巡らしてるから、誰にも見えないよ。」

秘書

「神様、今はそんな事よりもこの男に大事な用件が有るのではないですか？」

アレックス

「大事な用件？ 一体なんですか神様？」

俺は全く・・・・いや、恐らくだがまたこの神様が何かしたと考えた。何せ俺を『うつかり死なせちゃいました。』みたいな事を言つたから、また『うつかり』しちゃつた『だろつ。

神様

「じ、実は、僕もよく分らないから、後は秘書さんに、聞いといてね。」ヒュンッ！

アレックス

「・・・・逃げたな。まあ、当たり前か。それで？ 用件とは何ですか。」

秘書

「実は、カクカクシカジカ。」

アレックス

「まるまるつまつま・・・・・・マジですか。」

簡単に説明をすると、神様は俺に渡した能力を紙に書いて机の上においていたら、1個目と3個目の能力を神様が消してしまったらしい・・・・なんですか？

一応神様も悪いと思つたらしく、『埋め合わせる為の能力』 + 『新しく付け足す能力2個』でキャラにしよう。との事でした。

アレックス

「ならまた同じ能力を選べばいいのでは？」

秘書

「残念ながらそれはできません。他の転生者に試してみましたが、その能力本来の実力が100%だとすると、10%も發揮できませんでした。それでもよければ構いませんが？」

アレックス

「遠慮しておきます。」

どうやらマジでヤバイ。あの1個目と3個目の能力は『戦闘にはもつてこい』程の力だったのでへこんでいる。だが俺は『一方通行のベクトル操作と、『Prototype』の、アレックス・マーサーの全能力MAX状態』並に使える、能力を思い出した。

アレックス

「まず最初に消えた1個目の能力は、ワンピースに出てくれるCP

9が使用できる六式全てが使用可能。  
もう一つは、魔法剣の使用が可能。」

秘書

「かしこまりました。では後の『新しい能力』の方をお願いします。」

カキカキ

アレックス

「1個目は複数の悪魔の実が使用可能。動物系悪魔の実「ネコネコの実 モデル」、豹「ゾオ」、動物系悪魔の実「ウシウシの実 モデル」、麒麟「ジラフ」、動物系悪魔の実「イヌイヌの実 モデル」、狼「ウルフ」、超人系悪魔の実「ドアドアの実」の能力で。」

2個目は、力ナゾチにならなくなる事。」

秘書

「分かりました。しかし悪魔の実の能力で『豹』と『麒麟』と『狼』の使用中は『ドアドア』は使用できません。」カキカキアレックス

「わかりました。」

俺の目の前にいる秘書さんは一通り書き終わったのか、こちらを見てきた。実に綺麗な人だ。例えるなら『大和撫子』+『エロカツ』『コイイ』みたいな感じ。

話は飛んで、また神様みたいに『ミスをしました。』何て有りませんように。

秘書

「能力は完璧に渡しておきましたので安心して下さい。それと見た目をワンピースに出てくる『カク』に変えておきました。あと、この世界に『前の貴方』を知っている人物を『今の貴方』にインプットしておきました。」二コツ

カク

「あ、ああ。すまないの。」

秘書

「詳しい事は次回の投稿で報告します。」

カク

「メタ発言は禁止じやぞ。」

ワシがお礼を言い終わると同時に秘書さんは、ワシの前から消え去つた。取り敢えずミラの元へ行き、ベットの横に椅子を置いて『形だけの看病』をしていた。

（翌朝）

ワシは目が覚めると、自分に毛布が掛けられていることに気が付いた。窓の外を見るとだいぶ日が上りはじめている。

ギルドの方は、だいぶ騒がしくなつていたので顔を出せつと椅子から立ち上がると、扉が開いて2人が入つて來た。

エルフマン

「あ、おはようございます、カクさん。朝まで姉ちゃんの看病をしてくれて有難うござります。」ペコリ

リサーナ

「カク、おはよー。ミラ姉の看病ありがとね。」ニコニ

カク

「ああ、おはよう。ミラの具合はどうじゃ？」

リサーナ

「『もう大丈夫』ってミラ姉が言つてたよ。」

ワシは『そうか。』と言つてからエルフマンとリサーナを連れてギルドの方へと向かつて行つた。どうやら誰も俺が変わつた事に気づいていないみたいだ。特に鼻が。

そこでワシは、喧嘩していたナツとグレイを止めたエルザが、今度はミラと喧嘩をし始めたのを見た。

エルザがこつちに気が付いてミラに内緒話をしていると、次第にミラの顔が赤くなつていつた。そして、ミラが急に走り出したのを見ていた。

↓ Side Out アレックス改めてカク

↓ Side エルザ

エルザ

「んつ？またナツとグレイが喧嘩をいているのか。憲りない奴ですね。」

マカロフ

「まったくじゃのう。エルザ、すまんがあの2人の喧嘩を止めてくれんか？依頼が終わつたばかりで悪いんじゃが。」ポリポリ

エルザ

「わかりました。」スツ

ナツ

「おい、グレイ。邪魔なんだよどけ。」ギロツ

グレイ

「うるせえな、おめえがどけばイイだらうが、ああ！？」ギロツ

「ゴシンツー、ゴシンツー！

そんな2人の喧嘩をエルザは死角になつてゐる所から殴りつけで無理矢理だが黙らせた。

ナツ&グレイ

「～～～ツ！」ジタバタジタバタ！

エルザ

「お前達はまた喧嘩をしていたな。どうしてそんなに仲が悪いんだ？」

グレイ

「な、何を言つてるんだ？お、俺達はいつでも仲良しだぜ？な、なあ。」ガタガタ

ナツ

「も、もちろんだぜ。」フルブル

ナツとグレイとたわいも無い会話をしていると後ろからあいつの声が聞こえた。

ミラ

「よお、エルザ。朝から居ないもんだからてつきて隠れてるかと思つちまつたぜ。」

エルザ

「ミラ、私はてつきてまだベットで寝込んで、カクに看病して貰

つて甘えてるかとおもつたよ。」

ミラ 「な、な、な、ノノノ「カアア！」

私がミラにカクの事を話しながら茶化すと、今まで見た事がない位の驚きをし始めた。

そして私はリサーナとエルフマンが、カクを連れて来たのを見つけたのでミラに追い打ちをかけた。

エルザ

「ほら、後ろにいるカクが心配そりでお前を見ていのぞ。」ボソッ

ミラ

「￥（／＼／＼／＼）ダッシュ！」

私がミラに内緒話すると、顔を真っ赤にさせながら走つて行つた・・・・どうやらかなり照れてるようだ。

Side Out エルザ

Side カク

カク

「ミラはもうじたんじや？ あんなに慌てて何か用事でも有るのか？」

エルフマン

「いえ、今日は日曜日なので予定は無いはずです・・・リサー

ナ、何か聞いてる？」

リサーナ

「私も聞いてないよ。」

ワシはさつまで話していたエルザに話を聞くと、『やあ〜。』と言  
われた。その後、ワシがミラに会つ度にミラは顔を赤くしてくる。

## 第000・6話 //の元へ行くと、アクシデント発生。（後書き）

途中で予告があつたように主人公の能力を次回報告します。

え、何で能力えたかと?」都合主義ですから(笑)

実際は『プロトタイプ』のゲームがそこまで知らないからです。すいません。m(—\_)m

ではまた次回!

b y 天翔る墮天使より。

## これから主人公の能力説明（前書き）

どうも、天翔る墮天使です。

今はマジで下さいません、としか言えません。（丁・丁）

能力はもう一度と変えないので、許して下さい。

## これからの主人公の能力説明

|     |   |   |   |   |        |
|-----|---|---|---|---|--------|
| 名前  | ・ | ・ | ・ | ・ | 力ク     |
| 性別  | ・ | ・ | ・ | ・ | 男性     |
| 一人称 | ・ | ・ | ・ | ・ | ワシ、～じや |
| 容姿  |   |   |   |   |        |

|      |   |   |   |   |                           |
|------|---|---|---|---|---------------------------|
| 【服装】 | ・ | ・ | ・ | ・ | 『CP9』の服装、又は『ガレーラカンパ二ー』の服装 |
| 【目】  | ・ | ・ | ・ | ・ | 黒色                        |
| 【髪】  | ・ | ・ | ・ | ・ | オレンジ色の短髪                  |
| 【身長】 | ・ | ・ | ・ | ・ | 180センチ                    |
| 【体重】 | ・ | ・ | ・ | ・ | 70キロ                      |
| 【年齢】 | ・ | ・ | ・ | ・ | 23歳                       |

（新しい能力）

### 六式

CP9が体得している6種類の超人的体技。長い訓練を重ね全身を武器とする。6種類すべてを体得した者を「六式使い」と呼ぶ。

指銃<sup>シガソ</sup>・・・・指で敵の体を撃ち抜く。技のバリエーションは「一転集中」という点は共通するが、必ずしも「指から」とは限らない。基本的に鉄塊が習得できていないと使用不可能。

嵐脚<sup>ランキヤク</sup>・・・・蹴りで呼び起こす鎌風。

剝<sup>ソル</sup>・・・瞬発的に加速し、消えたように移動する移動技。

鉄塊 テツカイ · · · 肉体の硬度を鉄の甲殻にまで高める防御技。但し鉄を碎く程の強度を防ぐ事は不可能。

月歩 ゲッポウ · · · 爆発的な脚力で空を蹴つて宙に浮く回避技。

紙絵 カミエ · · · 敵の攻撃を紙の如くヒラヒラと避ける回避技。

六王銃 ロクオウガン · · · 六式を極限まで高めた者が使える六式。

生命帰還 セイメイキカン · · · 意識を身体のあらゆる所に張り巡らせ、操る技。

（詳しい技）

ロブ ルツチ

技一覧

六式

動物系悪魔の実「ネコネコの実 モデル”豹”」レオパルド

指銃「黄蓮」オウレン · · · 片手で連射する指銃。

剝刀 カミソリ · · · 锐い軌道で空を走る、剝・月歩の複合技。

\* 嵐脚「豹尾」ヒョウウヒ · · · 豹形態で放つ螺旋を描いて飛ぶ嵐脚。

鉄塊「空木」ハツキ · · · 鉄塊によるカウンター。常人ならば拳が割れる。

\* 飛ぶ指銃「撥」<sup>バチ</sup> · · · 豹形態で、鋭い人差し指の爪の先から空気の塊を弾き飛ばす。

\* 飛ぶ指銃「三撥」<sup>ミツバチ</sup> · · · アニメオリジナル。撥の3連射。

\* 飛ぶ指銃「火撥」<sup>ヒバチ</sup> · · · アニメオリジナル。人差し指の爪の先に発生させた炎の塊を弾き飛ばす。

嵐脚<sup>ガイチヨウ</sup>「凱鳥」<sup>カイジョウ</sup> · · · 羽を広げた鳥の様な嵐脚で鉄の外版に切れ込みを入れる。

指銃「斑」<sup>マダラ</sup> · · · 両手で連射する指銃。

六王銃<sup>ロクオウガン</sup> · · · 六式を極限以上に極めた者が使える六式最終奥義。両手の握り拳を相手に構えて衝撃を送り込む。

\* 最大輪<sup>さいだいりん</sup>「六・王・銃」<sup>ろく・おう・がん</sup> · · · 生命帰還を解除し、相手が逃げられないよう尻尾で掴みフルパワーで放つ六王銃。

\* 生命帰還<sup>カミエフシン</sup> · · · 紙絵武身生命帰還の一種で筋肉を収縮することでパワーを落とす代わりにスピードを上げる。

力ク

動物系悪魔の実「ウシウシの実 モデル”麒麟”<sup>ジラフ</sup>」

技一覧

六式

嵐脚「白雷」<sup>はくらい</sup> · · · 上方から撃ち落す嵐脚。

嵐脚「乱」・・・・嵐脚の乱れ撃ち。

\* 嵐脚「周断」・・・・キリン形態によるリーチ・重量増大、そしてこれによる遠心力を利用して放つ最強の嵐脚。

嵐脚「線」・・・・一直線に走る嵐脚。

\* 鼻銃ヒガン・・・・キリン形態の鼻で放つ指銃。岩に穴を開けるほど威力がある。

\* 極・鼻銃「麒麟マン射櫓」(キリマンジャロ)・・・・首を縮めた「キリン砲台」から撃ち出す究極の鼻銃。

\* 鉄塊「無死角」・・・・鉄塊状態で体を折りたたんで四角にする。

\* 嵐脚「麒麟時雨」・・・・嵐脚を天井に向かつて乱れ撃ちし、天井から跳ね返ってきた斬撃の礫を降らせる。斬撃は自分にも降りかかるが鉄塊で防ぐ。

\* 嵐脚「龍断」ロウダン・・・・両足で縦に放つ嵐脚。

\* 嵐脚「ネジ白刃」ネジはくじん・・・・体を回転させながら放つ嵐脚。

嵐脚手裏剣・・・・手裏剣状の嵐脚を乱れ撃つ技。

\* 鎌麒麟・・・・キリン形態の首で相手をなぎ払う。

\* パスタマシン・・・・首を縮めすぎると何故か手足が伸びてしま

まつたことで命名。邪魔な首を仕舞い手足のリー・チが長くなる利点がある。

\* 鞭竹林 へんちキリン · · · 首を鞭のよつに相手に叩きつける連續攻撃。

\* 猛竹林 もうちキリン · · · 鼻銃の連續攻撃。

\* 逆鱗 げキリン · · · 嵐脚・一刀を使った四刀攻撃。

## ジャブラ

動物系悪魔の実「イヌイヌの実 モデル”狼”ウルフ」

六式使いで唯一、全身鉄塊状態で動く事ができ、それを利用した

「鉄塊拳法」を駆使する。

### 技一覧

#### 六式

十指銃 じゅっしょく

・ · · · 両手の付け根を合わせて攻撃する十本の指による

#### 指銃。

月光十指銃 げっこうじゅっしょく

・ · · · 月歩で勢いをつけた十指銃。

\* 嵐脚「孤狼」じりゆう · · · 波の様に跳ねていく嵐脚。

\* 嵐脚「群狼連星」ルーパスフォール · · · 4つの狼の形をした嵐脚を放つ。

#### 鉄塊拳法

\* 狼弾 オオカミハジキ · · · 鉄塊をかけた両腕で敵を弾き飛ばす。

\* 狼牙の構え。・・・・・ 鉄塊をかけた防御技での構え。

\* 狼芭の構え。・・・・・ 腰を落とした状態で両手をついて、体を浮かせた構え。

\* 狼狩エリア・ネットワーク・・・ 狼芭の構えから四方八方から浴びせる斬撃。

\* 重歩狼<sup>ドン・ボーゴウ</sup>・・・・・ 鉄塊をかけた手で放つ強力なパンチ。

\* 魔天狼<sup>マテンロウ</sup>・・・・・ 鉄塊をかけた両足で敵を蹴り上げる。

## ブルーノ

超人系悪魔の実「ドアドアの実」

### 六式

鉄塊「輪<sup>りん</sup>」・・・・・ 鉄塊状態で両足を一直線に伸ばし、側転のよう、回転しながら攻撃する。

鉄塊「碎<sup>さい</sup>」・・・・・ 鉄塊状態で相手を殴りつける。

鉄塊「剛<sup>じんじ</sup>」・・・・・ 最強強度の鉄塊。

ドアドア・・・・・ 壁などの触れた物にドアを作る。閉じると元に戻る。

空氣開扉<sup>エアドア</sup>・・・・・ ドアドアの実の真骨頂。大気の壁にドアを作り出し自由に移動ができる。

回転ドア・・・触れたものに回転ドアを作る。ドアドア同様閉めると元通りになる。

## フクロウ

### 技一覧

#### 六式

六式遊戯「手合」・・・相手の体技の強さを攻撃を受けることによつて測る能力。

「獣巖」<sup>ジュゴン</sup>・・・・指銃の速度で打ち抜く超重量パンチ。

「獣巖」<sup>フクロウ</sup> 奥義梟叩き・・・・獣巖の連打。

「鉄塊玉」<sup>テッカイダマ</sup>・・・鉄塊状態、かつ剝の速度で高速回転して相手に突つ込む。

「紙絵」<sup>スライム</sup>「軟泥」<sup>スライム</sup>・・・体をスライムの様に変形させて攻撃を避ける。

今回はクマドリとカリファの能力は無しの方向で行かせてもらいます。

【\*】このマークはその悪魔の実を使用中になります。  
見た目はカクですが、ルツチやジャブラの悪魔の実を使用中はルツチやジャブラが悪魔の実を使つている姿っぽくなります。  
もちろんカクもそうです。

## これから主公の能力説明（後書き）

何だか、膝が痛いので温めながらねます。

皆さんも体調管理には気を付けて下さい。  
うがい手洗いをきちんとしましょう！

ではまた次回！

by天翔る堕天使より。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4563z/>

---

FAIRY TAIL～妖精の化物《フェアリーオブモンスター》～  
2011年12月26日02時54分発行